



J. Seemann, Y.I. Chirkov,

J. Lomas, B. Primault 著

農業気象学

Agrometeorology

Springer-Verlag, 1979, 248×170

mm, 324 頁, DM. 98

農業科学と気象科学の間に新しい研究領域—農業気象学が呱呱の声をあげたのは1920年代に入ってからといわれている。それ以来、多くの研究者・技術者の努力によって、農業生産と気象・気候条件の関係について多くの研究が積み重ねられ、また第2次大戦後の接地気象物理学の導入及び測定法の革新によって、ある一部では面目を一新するまでになっている。

しかし、人口の圧力は発展途上国を中心にして上昇し続けており、また1970年代に入ってから異常気象の頻発は多くの国々で食糧生産を不安定にし、世界の食糧需給の逼迫に拍車をかけている。特に、農業生産のためのインフラストラクチャーの不備な発展途上国では、食糧生産は気候・気象条件の影響によって極めて不安定な状態にあり、大きな旱魃が発生した時は悲惨な飢饉に度多く襲われているのは新聞・TVの報ずる通りである。

一方、食糧生産の向上及び安定化のために種々な農業技術が研究・開発・実施されているが、それらの実施にあたっては農業-農作と気象・気候との相互関係に関する知識は大きな役割を果たしている。これは古くからあった適地適作の示す通りである。多くの発展国（ヨーロッパ諸国、アメリカ、カナダ、ソビエト、日本など）では農業気象学分野における活動は活発で、それぞれの地域において極めて有用なデータが収積され、農業の実際に役立っているのみならず、特徴ある農業気象学のテキストの作成、教育コースの提供がなされている。

これと全く逆の状態が発展途上国ではみられ、十分なテキストも教育コースもなく、変動する気候条件のなかで食糧生産に悪戦苦闘している。このような状況を改善するため WMO のCAgM（農業気象委員会）を中心に

してレクチャーコースが何回となく組織され、多くの農業気象技術者を発展途上国へ送り出している。そのなかで、農業気象学のテキストの作成が指摘されていた。本書は、それに応えてドイツの農業気象学者 Seemann, ソ連の農業気候学者 Chirkov, イスラエルの農業気象技術者 Lomas, スイスの気象学者 Primault が協力執筆したものである。

本書は、第1部 緒論、第2部 農業気象学の物理的・気象的基礎、第3部 応用農業気象学 からなり、第2部には太陽放射、風速測定など13章が収められていて、Seemann と Primault が分担執筆し約100頁があげられている。内容は極めて平易で記述的であるが、優れた耕地微気象のテキストをもつわが国の農業気象研究者にとっては、得る所はすくない。しかも引用文献が古くヨーロッパ特にドイツに片寄っている感をいだかせる。その点で主として乾燥気候帯に分布する発展途上国の農業気象の研究や開発にどの程度寄与するか若干疑問を抱かせる。

第3部の応用農業気象学には200頁が割かれていて、本書の主目的はここにある。4人の著者が、農業気候学、ハウス気候、旱魃、灌漑など24章を分担しているが、それぞれの国の風土上に築かれている農業の実際を背景として執筆されている。それゆえ、各章の内容にはわが国の農業気象テキストにないものもあり、面白い記事が多い。特に、Lomasの書いた灌漑には50頁が割かれていて乾燥地農業の実態がよくわかる。また、最後には農業計画と作物分布への農業気候の利用が説かれている。

このような特色があるが、風土的色彩の強い農業気象学、なかでも応用農業気象学をユニバーサルな視点から体系化することの困難さを痛感させる書物でもある。特に、テキストを狙いながら理解の助けとなる図・表のすくないのも気にかかる点である。農業気象学は風土に密着してこそ、その実用性・応用性を発揮できるものと思われる。

(内嶋善兵衛)